

で五反ほどの田畑を守っておられる。

畑に栽培されている茄子が順調で好成绩のよう
です。

抑留当時の悪夢を思うとき、現在が夢のように
幸福ですと淡々と語る日焼けした顔が印象的でし
た。

(岐阜県 鈴木 善三)

思い出の記

静岡県 望月 貞

昭和十九(一九四四)年十一月十日応召。三十
歳。妻、三児を残して、静岡県内丙種合格者、愛
知県内丙種合格者、年齢三十歳前後ばかりと、大
分県内、甲、乙、第二乙種、十九歳〜二十歳の若
者との混成。満州国海拉爾ハイラルの空き兵舎に満州歩兵
第二五五連隊を創設、通信中隊に編入。二個班で
約四十人前後。各班に上等兵一人宛、指導に当た

る。班内での簡単なる身体検査を行う。丙種の者
は目耳の欠陥者、腕力、体力の虚弱者多く、「こ
れではとても」と、上等兵嘆く。上部からは「使
える兵隊」を急遽作成の方針指令ありとの由。指
導員不足はビンタ、ビンタで詰込み式。すべてが
「上官の命令は朕の命令と思え」であり、丙種な
がら一旦召集されたからには「七度死して君恩に
報いん」と勇んで出征した身、これも当然。ビン
タは日常茶飯事。「歩兵操典」「軍人勅諭」「戦陣
訓」の詰込み。銃剣術、匍匐前進、銃の手入れ、
通信機材の収納、馬の手入れ、水やり、飼葉や
り、それが済まねば食事もできない。次から次
へ、小便する間も惜しい。夜は一日の欠点注意、
説教、反省、対面ビンタでやっと寝られる。これ
が「使える兵隊」になる過程の一つ。

「義勇報国、使える兵隊」にいつしかなくて、
敵戦車の下へ爆雷を抱えて飛び込むことも何とも
ない気持ちになっていた。

二十年四月三日、第一期検閲、連隊長他將校等

大勢監視。八時、演習開始。電話機を持って蛸壺に入る。ここが仮本部と決まり、電話線を張りながら前進して行った。そのうちピンポン玉くらいの雪がふわふわ降ってきた。たちまち前方は見えなくなる。外套で電話機を覆う。幾ら待っても前方からの連絡がない。幾ら電話機を回しても通じない。そのうち眠ってしまったらしい。手や足を三、四人で擦っている。襦袢姿だ。「何しているか」と言ったら、「これで良い」と言って帰って行った。病室のベッドの上だ。看護兵が、体が冷えて気を失っていたからマッサージした、もう少しでお陀仏だった、と言った。白ザラメのようなまぜい菓を飲む。黄疽だと言っていた。良い休みとなった。後で分かったことは、あの時は八時半ころで、雪で前も後ろも隣も見えなくなっていて、九時には積雪三十センチメートル、「演習やめ」で解散した。朝食後一人分の食事が残っていた。誰のだと騒いで捜しに来て、雪がぼっこり高くなっていたので分かったとのこと、意識がないの

には困ったとか。一週間ばかりで回復して連隊本部の電話交換室に配置される。

二十年七月九日、連隊の半数が興安嶺博克図の兵舎に入る。連隊長が出向、海拉爾は留守部隊となる。

二十年になってから日曜日の朝六時の「非常呼集」は慣例になっていた。八月八日も日曜日で「非常呼集」をした。八時ころ司団司令部より「明朝も非常呼集をせよ」と言ってきた。その旨を連隊長代理（連隊副官中尉殿）に報告、「よし、分かった」。その後は本部と司令部と直通電話で話しているようだった。本部の事務要員（下士官）は十四、五人で午後五時半には誰もいなくなったが、今日は二十時過ぎまでやっていた。電話室の隣は当番将校の宿直室である。二十一時に出動して来て巡回に出かけた。二十二時、司令部より電話あり、「誰か将校はおるか」「当番将校の少尉殿はただいま巡回中です」「次のことを必ず伝えよ。満州里の小松山付近から見たソ連軍の様

子がおかしい、明朝の非常呼集は五時にせよ」「復唱」「要らん」ガチャン、相当慌てているようだった。二十三時、巡回から少尉が帰ったので司令部の伝言を話す。「そうか、分かった。二時にまた巡回に行く、起こしてくれ」と寝る。

「司令部だ、満州里との連絡が全然とれなくなった、これからの連絡を注意して待て」。零時十分、「司令部だ、すぐ将校一人よこせ」、九日零時十五分だった。当番将校を起こし既に走って行き、言われた馬を連れてきて渡す。出かける。間もなく「司令部だ、まだ来ない」「馬で行きましたからもう着くころです」ガチャン。十分もたったか「司令部だ、もう二人よこせ」。一時を過ぎたころ、下士官、将校が、どういう連絡があったか、二三人出てきた。「司令部だ、あすの非常呼集は本物だ、主だった者がいたらよこせ」と言われ、皆に話すと、本部の直通電話で連絡していた。その後は交換室には電話はかかってこなかった。二時を回ったころは十七〜十八人集まってい

た。将校が話すのを小耳にはさむ。「昨夜、我が軍の満州里の監視所の小松山方面の報告によると、ソ連軍の不可解な行動あり、目下鋭意偵察中である。その後満州里の部隊との連絡一切皆無、電話無線の通信もなく、よって非常事態が発生したとみなし、万端遺漏なきよう準備してもらいたい。各中隊へ帰り即座に実施を頼む」との主旨で、各中隊へ走って行った。もう電話交換は用はないと思っていれば電話が鳴った。「司令部だ、非常呼集は四時にせよ。将校に伝えよ、連隊副官だ」連隊副官（留守部隊長）が司令部に行っていたのだ。皆各中隊へ出払って本部は空だった。

そのうち将校が帰って来たので話す。すぐ伝令を使って各中隊へ連絡された。そのうち皆、完全装備した者がどやどや集まってきた。毎朝雑巾がけした廊下も軍靴で右往左往、スリッパでいるのは俺だけか、班へ帰らなければ正装はできない。命令がなければ交換室から離れられないことになっっている。非常呼集のラッパが鳴っている。皆

出て行く。二人勤務の相棒はいつも風邪ばかりひいて半病人だ。班から交代者もくれないので仕方なしだ。ちょっと営庭をのぞくと副官が台上で叫んでいるのがよく見えた。すぐ交換室へ帰る。朝食を食っていると本部の下士官が来て「もう電話も来ないだろう、上官には俺が話しておく。今から本部の書類を焼いてくれ」と言われて焼却炉で燃やす。紙、書類は一度に入れても燃えるものではないことを知り、一坪くらいの穴を掘って、書類綴りを取ってバラバラにして燃やしていた。

誰かが「敵機が来た」と言った。ブルンブルンと音が聞こえる。本部の植込みの所で良く見えると言うので急いで見に行く。三、四人見っていた。今、爆弾を落とすぞ、それ落とした、あれは官舎（将校）の辺りだ、などと言っていた。単葉箱型の練習機がグリーンの塗装も禿げてみじめだ。前に操縦士、後が爆弾投下係か、斜め三〇度か、ここは山の上だが海拉爾の街からは七、八百メートルの高度か、小銃でも届くかと思われるが何の反

撃もないのか、悠々と行ったり来たりして落ちていたのが見えた。悔しいがいつまで見ていても変わらない。言われた書類の始末をする。倉庫から幾らでも持ってくる。相棒は班に帰ってもらう。夕食を食っているとやっと班から「帰れ」と連絡が来た。残りを全部穴にたたき込んで帰る。

もう、皆完全武装をして十九時の集合を待っていた。一部西山陣地へ配置された者は出発していた。既に馬が一頭残っている、それに馬車を付けて至急参加してくれ、と言われて既に行く。俺が以前に持った愛馬だ。銅葉桶と水を飲ませて既を見ると、誰も手に負えない蒙古馬が残っている。可愛そうだと思ひ馬栓棒を外したら一目散に走って行った。営庭へ行くと待っていた。間もなく暗くなった、海拉爾の街は赤々と空を焦がしている。なかなか出発の指示がない。小一時間もしたか暗闇の中、大勢の兵隊が動いていた。何だろうと思ひ聞いたら、朝鮮の新兵が入隊して来たのだそう。今から各中隊に配分するとか言ってい

た。今どき、運の悪い人たちだと思った。

興安嶺で陣地を構築している我が本隊へ至急合流し、ソ連軍を撃滅すべく出発した。ちょうど二十一時ころだと思った。営門を出ると左に行き、海拉爾の街が見える所を通って行くと、市街は赤々と燃えている。その熱気が山の斜面を這い上がってきて火がつきそうに熱い。どんどん進む。真つ暗闇だ。焼土戦術のため、懐かしの兵舎が燃え上がっているのが見えた。足元は全然見えないう。ただ手綱を持って歩いてる。思えば昨日から一睡もしていない。歩きながら眠っているのか、前が止まれば止まり、前が歩けば馬が手綱を引つ張り歩くのか、夜も昼間もなく、景色も全く覚えていない。パパンと銃声がした。周りを見たら皆伏せていた。いつの間にか先頭になっていた。前方を見たら黒服で銃を肩にかけ、馬で向こうの道を駆けて行くのが見えた。

五十メートル先の道端にトラックがあった。ドラム缶が一本乗っていた。ドラム缶から油が流れ

ていた。副官が「自動車の運転できる者がいたら動かして見よ」。一人が出て行ってキーが付いているのを見て、運転台へ乗ってエンジンをかけた。エンジンから火を噴いた。運転手が間一髪飛び下りた。荷台へ火が回った。ドラム缶が火を噴いて三十メートルも高く火の玉となって向こうへ落ちた。道路の前方の山の上から真つ黒い煙がもくもくと立ち上ってきた。副官や将校たちが集まって話し合った。「この道を行くと山を越して焼け石に出る、敵戦車が来て戦闘になり火災になったとみなす、よってこの道は行かれないから別の道を行く、しつかりついて来てほしい」と出発する。車が通ったこともない狭い所を行った。最後尾になってついて行った。車がやっと通れる細い峰を歩く。随分歩いた。暗くなつて、ここで一泊することになった。馬車から馬を外し灌木に縛り、好きだけ草を食ってもらうようにしておく。草の上に寝る。

目が覚めたらもう明るく、副官が何か話してい

る。近くに行った。「解散する」と言うのが聞こえたと思つたら皆一斉に、てんでんばらばらに山を駆け下りて行った。俺の馬まで盗つて行った。

仕方なしに山を降りて行った。先の山の上で大勢集合していた。やっとたどり着く。今日は十三日だと言っていた。副官が話をした。「これからは個人的な面倒は見られないから片足になつてもついて来なさい、誰も大変ですから。本隊へ向かつて出発します」。将校、下士官は馬に乗っていた。その後へぞろぞろついて出発した。このとき「人を当てるな、頼るな、自分一人だ」と痛感し、自覚し、心にしっかり言い聞かせた。

何とかついて行ったがちょっと一休みした。皆追い越して行った。いつしか眠ってしまったのか、目が覚めたら満天に星が輝いて足元もよく見えた。そこらを探したが誰もいない。誰も起こしてもくれなかつたのか、ぶつぶつ言いながら歩いた。山から降りたら道があるだろうと降りて行ったら川があつた。稲むらのようなのがあり、星明

かりでは渡れないので稲むらの上で寝る。目が覚めて見ると五十メートル先に人が、兵隊が歩いている。川を渡って行くと広さ六メートルはある新しい道で、まだ轍わだちの跡もなく、小石がごろごろしている。東南の方向へと歩く。兵隊も避難する人たちも皆同じ方向に向かって歩いている。「どこから来た？」くらいは言ってくれるが、「一緒に行ってくれ」と言つても返事も無い。全く信用されない。一人で行くしかない。しばらく歩いたら山に突き当たり道は終わった。細い道を登って行く。山の中に小屋があり、扉もしっかりしていた。むしろもたくさんあり泊まる。夜中にフーフーフー、目を覚まされる。小屋の周りにいっぱいいる。狼だと気がつく。これは危険だと銃を引き寄せ弾を込めようとそつと転てん邑ぼを上げた。カチと音がしたら一斉に逃げて行った。十四はいただろう。

よく眠る。よく手入れされた根回り二十センチほどの杉林で、緩い下り坂でとても広い。所々に

桔梗が咲いていた。いつか根を食べられると聞いていたので取って食ってみた。水気は余りないが食える。何本も取った。雑囊に入れた。馬車道に出る。どんどん行ったら広い道、トラックも通れる道に出た。兵隊が三々五々、皆落伍者だ。民間人も多い。誰に話しても同行してくれる人はいない。緩い登りになっている。突然頭上に部隊で見た飛行機が現われた。近くに兵隊がいて「急いで伏せろ」と言われ、草の中へ飛び込んで飛行機の遠ざかるのを待った。去っていったので話をする。何と我が部隊の者だが中隊が違った。三人である。三日ばかり前に興安嶺の博克図陣地から出てきてあの山の中腹で戦車に会い、一人が破甲爆雷で戦車の下へ入って爆発した。戦車は三十センチも上がったが、砂塵がおさまったら走り出し、道路脇に隠れていた兵隊を機関銃掃射され、一人は指を怪我していた。とても近づけない。二キロくらい遠い山を指して、あの中腹でやられて部隊へは帰れずにいると。あの白い煙のようなのが戦

車やトラックの行き来する埃だと。そのようにも見えた。夜になってライトの明かりが良く見えると、またブルンブルンと飛行機が偵察に回って来る。やっと気強い仲間ができたが、「俺は本隊に行かねばならないからこの道を行ってみる」と皆で行くことになった。夜は固まって道端に寝た。桔梗の根が四つあった。一つずつ分けて食った。山道を一列になって歩く。どうも俺の歩きが一番遅い。脚気だった。とうとう二人になってしまう。小川で水を飲んだり、夜になればまた道端で寝る。道幅が広くなった。

部落か街に近づいたと思いつながら行くと、貨車に材木を積んだのや機関車が蒸気を出して走っている広い操車場だ。電話交換室に貼ってあった興安嶺の地図で思い出し邑林パルではないかと立っていたら、自警団の腕章を付けた人に声をかけられつついて行く。狭い工員休憩室で話を聞く。大きな満頭を食べなさいと差し出され、夢中でかぶりつく。久しぶりで穀類が喉を通る。「ここは邑林と

言う所です。これから行けば札蘭屯ジャラントンに出ます。日本は八月十五日、ロシアと講和しました。札蘭屯には日本兵が大勢集まっております。これからそこへ行くといいです」と言つてまた満頭を一つずつくれた。二人で歩きながら「講和」ということが氣になつて互いに考えた末、札蘭屯では負けても齊々チチハル蛤爾ハルではまだ戦つてゐるだろうと結論が決まり、細い脇道へ入り南下し、健在に戦つてゐるだろう日本軍へ合流し、戦うつもりで歩く。道もなくなり、山の峰が割と歩きやすい。

やつと人の通る道に出る。右へ行つたら何となく騒がしい音がする。木立の透き間から遠くを見た。七、八百メートル先に往来がある。人、馬車、戦車もぞろぞろ通つてゐる。トラックも行き来してゐる、こちらと同じように南へ少し下降している。これはヤバイと引き返し南下する。だんだん森林地帯を抜け、あちこちに畑が見える。大根が目に入り一本ずついただく。何日か畑の大根、人参、マクワ瓜、トウモロコシなどで食うに

は困らなくなつた。上等兵と他に二人来た。「どこから来ました」「満州里だ」「小松山とはどんな所ですか」「お前は小松山知つてゐるのか」。八月八日夜の電話交換のことを話したら「それでは俺の見たことを話す」と。

「小松山には監視所があつた。向こうはソ連領。いつも交代で勤務してゐる。朝になったら今まで見えなかつたトーチカなど良く見える。向こうの監視所も覆いを外す。何もかも取り外しロシア陣地が丸見え。あそこにもこちらにもトーチカが見える。人の歩くのも兵隊の移動も戦車の行きかう様子も双眼鏡ではつきり見える。何が何だか分からず、ただおかしい。不可解なことをする。ロシア人のやることは分からない、など言い合う。夕方勤務が終わる班へ帰り、知らない者には見に行つて来いなどと勧めたりした。夜中に砲弾が爆発した。飛び起きて直感した。服を着て飛び出す。ボンボン砲弾が落下し爆発する。真っ赤な大きな風船が揚がつていた。もうどうすることも

できない。厩へも行けない。風船が揚がると同時にロシア軍のトーチカ、戦車、砲車、あらゆる火砲が火を噴いて日本軍の陣地、兵舎、官舎、民家、市街を分担して狙って一斉砲撃された。たちまち火災となった。またたく間に戦車も越境して来た。這々の体で逃げて来た。あるとき俺も見張所にいたらロシアの砲弾で粉々になっていただろう、運が良かったと思うよ。この二人も俺の部隊の者だと言うから一緒に連れて来た」と言っていた。彼らもまだ講和を知らないらしい。「これからはロシア兵に捕まらないよう行くだけだ」と言い残して行った。

ある日、満服を着た人が話しかけてきた。「あなたたちは早く軍服を脱いで満服に変装しなさい。いつ襲撃されるか分かりませんよ。私には近づかないで下さい、私が日本人だと知れたら私も危ないですから」と言って逃げるように行ってしまった。

その次の日、湿地帯に広い道路ができていて、

道路より百メートルくらいの所に満人部落があった。そこで五、六人の村人が話しているのを見て通った。しばらくして人の声がするので後ろを見たら、連れが満人に捕まっていた。これは危ない、逃げる自信もなし。銃の遊底を湿地に投げ、銃も投げ、弾もバラバラにして湿地に投げたが追いつかれ取り巻かれてしまった。大鎌、ノコギリ、ボールなどを振り上げ威嚇し、帽子を寄せ、上衣を寄せ、襦袢、ズボン、靴、袴下、靴下、越中ふんどしまで取られスッポンポン。頭にくたのでズボン、上衣、草履も傘も寄せと言ったら、案山子の着るようなポロポロの服を寄せた。そして解放されたが、一人は先に行ったので私と三十メートルばかり離れて、ボールかノコギリを持って追いつくために暗くなるまでついて来た。言われた通りに満服に変装された。命には別状がなかった。棒切れを拾って杖と護身用にした。草むらの中で、遠くの山で狼の鳴き合う声を聞きながら寝る。

今日は良い天気だ。遠くから人参畑、大根畑、トウモロコシ畑は良く分かる。周りを見回して百姓のいないことを確かめて一本ただく。幾らでもあるから余るほどは取らない。満人に見つかからないよう歩く。人を見たらすぐ隠れる方がよいと思って隠れることにして歩いた。遠くから見て西瓜畑だと思っただらマクワ瓜だった。人の目を警戒して二ついただいた。畑がある間は食べ物には心配ないと歩く。小川があった。久しぶりに顔でも洗おうと川に下りたら、稲が鈴花をいっばいつけたのが目に入った。随分広い田圃だ。

遠くに屋根が見えた。今夜はこのあき開拓団へお世話になろうと畦道に行く。キャツという女の悲鳴に驚く。大鎌、ノコギリ、ボールなどを持った五、六人の満人が出てきた。しまったと思ったが「日本人だ」と言ったら分かったようだ。五、六年の小学生らしい男の子に俺の言うことが通じた。ここは朝鮮人部落で、満人が怖くて出歩きも困難だ、今夜泊まって明朝は出て行ってもらいた

いと言われた。小豆御飯をいただき安心して眠る。草刈鎌と棒の先へ包丁を付けた二人に守られ、遠くに見える部落へ送って行くと言われ、途中で自警団の腕章をつけた二人に渡される。洋館の建物へ入る。警察官の服装だと思った。しっかりした日本語で「私がこの署長だ。ここはリサントンと言う村だ。あなたが初めての日本人だ。今日は八月三十日です。日本は八月十五日に負けました。戦争は終わりました。日本人の生命は絶対守るよう蒋介石からの通達がありましたから安心して下さい。私が責任を持ちますから、ここにいる間は私の指示に従って下さい」と言われて安心した。自警団員に引率され旅館の二階へ。「今夜はここへ泊まります」と言って去った。しばらくして二階から通りを見た。道路は大勢の人でいっぱい、五十人はいた。今夜はお祭りでもあるかと思っていた。自警団員二人が来て、署に帰ると言って人混みを分けて戻る。早速、署長が言うには、「あの群衆は、半分はあなたを可哀想だと同

情している。あとの半分は、日本人だ、殺^やってしまえと言っております。日本人の生命の保護を命じられた私として、あそこは危険ですから署の留置場に入って下さい。ここは悪い人が一番嫌い、また来ない所です、私があなたの命は保証します」と、時代劇で見る牢屋、八畳間二つ、監視警護で一夜安眠した。満州で働いている俺の兄弟、夫婦、子供を合わせると七、八人は来ている、そんなに日本人は怨まれているのか、まさか殺^やられてはいないだろうとも想像が浮かんだ。

翌日より落伍した兵隊が入って来た。お互いにかかわらないように皆他人だ。十日ほどしたか、寝られないくらい満杯になって別の所へ移ることになる。田圃道を行く自警団員を前後左右に嚴重警護で、満人暴徒の襲撃に備えて監視しながら進むこと二時間余、歩いて学校のような所へ入る。大きな街だ。我々六、七十人。校庭に座っていた一人が演壇に上がり日本語で流暢に話し出した。

「日本は無条件降伏したことはご存じですね。あ

なた方日本人の兵隊は今から我々の指揮下に入った。これからは我々の指示に従って行動して下さい。逆らうことは許されぬ。決して無理なことは言わないから安心して下さい。また言いたいことがあれば何でも言ってみなさい」……滔々と話した。終わってこちらへ近づいてきた。背広にネクタイで小柄だがスキツとした白人、白系ロシア人と思った。私と同じ満服を着ている五、六人のところへ来て、「君たちは日本人か。日本の軍人がそんなみすぼらしい格好をして恥ずかしくないか。私はとても見るにたえない。すぐその服装は止めなさい。恥じを知れ」と一喝された。上官に叱られているような気がした。

部屋へ入ると裸になって、大きな桶に水が入っている、水風呂だ。石鹼も使った。一カ月余の垢も落とした。袴下、襦袢と着る順番にたくさん並べてあって、自分の体に合うのを着てゆく。最後に靴をはきゲートルを巻いて戦闘帽まで、武器を持たない日本兵ができた。校舎へ泊まる。朝食は

堅焼き煎餅とスープだ。二十人ばかり指名され、スコップとツルハシを持たされ道路工事だ。ここは碾子山てんしざんという所だそうだ。興安嶺へ行く本道だ。幅は二十メートルもあり、戦車、自動車、馬車の行き来が激しい。穴ボコがいっぱい。通行の邪魔にならないよう直す。指揮者はロシア兵の伍長か、兵隊二人、炊事係一人で、道端の土を取って埋める。西へ西へと進む。夜は道路脇でシートをかぶって固まって寝る。仕事の指示はするが、要求、早くやれとか一言も言わない。古シートを拾ってモッコを作って土を運んだら喜んでいた。何の文句も言わず、楽しい十日間であった。兵舎の前へ来たなら「スコップもツルハシも置いてこの門から入って行きなさい」と言われた。門番は銃に円盤が付いた変な物を持っていた。あれは何だと聞いたら、あれが有名なマンドリン銃だと教えられた。七十二発も入っているそうだ。ここは博克図だ、そこらの兵隊に聞く。ここは元日本軍の兵舎だ、今はこの辺で武装解除した日本軍の収容

所だ、何部隊も入っている、二五五連隊はおるか、指さして、それが二五五連隊だ。明日帰還列車が来ることになっていると。

兵舎の入り口へ入って「望月一等兵参りました」と叫んだ。三段ベッドの上の方で手を振る者がいた。降りて来て話す。「俺も参加できないか」「もうずっと前に二千人で打ち切りでとても割り込めない、あきらめて後で帰れ」と言われて、「帰ったら俺の家に知らせてくれよ」と頼む。そこで「副官二百人くらいが八月十五日、朝霧の中でソ連兵に包囲され全滅された」「お前も一緒に戦死したと今までそう思っていた。どうしてここへ」「俺は十三日に落伍してしまった」と話す。たくさんの兵舎にぎっしり詰まって何部隊もある。皆二千人単位で順番を待っている。毛布を一枚もらって兵舎の空いている所へ入って寝る。そこが自分の住みかだ。毎日焚き火をする所がある。そこへ集まってきて情報、雑談、漫談、落語、映画説明等々、誰かが暇つぶしに話してくれ

る。いつも七、八人は集まっている。用がないので毎日毎日火の番だ。薪は誰かがどこからか持ってくる。

だんだん寒くなってきた。雪もちらつくようになった。貨車が来ては出て行く。落伍者も時々入ってくる。さすがに十月に入ったら寒さが身にしみる。堅焼き煎餅とスープだけでは少し物足りない。また憂き紛らわしに焚き火のところに行く。

やっと十月十日、帰国列車に乗った。博克図の兵舎が空になった。貨車の中は二段ベッドで、頭がつかえて立ってられない。食事分配で列車が止まる。そのとき飛び出て用便をする。線路から遠くへ行くと逃亡とみなしてドンと来る。満州里を過ぎチタを過ぎても西へ行く。行ったり来たり引込線へ入って動かない。これは帰国ではないと思う気持ちになってきた。配給停車と置いていたから全員下車だというので降りる。ぞろぞろついて行く。紺色の服を着た人たちと兵隊といた。部屋

割りがあって部屋が決まる。帆布の袋が各人のベッドにあつて、その袋に外の乾草を詰めるように言われる。藁布団と枕ができた。自分のベッドへ入れる。毛布は一枚。昼飯は食堂で食べる。長テーブルに長腰掛け、八人腰掛けて食べられる。一度に百人前後食べられた。炊事係が平食器に黒パン兼食器にスープを入れたのをテーブルに並べてある。勝手に行つてどこでも食べる。各部屋にはペーチカがあり、大きなアルミ薬缶が一個ある。水は外の井戸で汲んで来る。ペーチカの横には薪が積んである。いつでも燃して良い。薪は炊事でノコギリと斧を借り、原木を切つて割つて持つてくればよい。炊事の横に薪用原木が山と積んである。至れり尽くせりだ。初めてのペーチカ、皆集まって雑談に花を咲かせる。ふんわりした藁布団で貨車のゴトンゴトンもない。少しの揺れもない。いつか眠っていた。

十月十二日午前九時ころ「全員集合」がかかる。紺色の服は満鉄社員、軍服は兵隊、台上にロ

シア将校が上がり話す、それを通訳が伝える。「私がこの収容所長である。君たちはすぐ帰られる。但し日本人捕虜が多いので帰る順番がある。

それを待っている間、十分体力をつけ帰国に備えてもらいたい。我々の言うことを良く聞いておとなしく順番を待ってもらいたい」手を叩く者もいた。皆安心した笑顔が戻った。希望が湧いた。午後から冬服交換をした。医務室の入り口で全裸になる。袴下と襦袢と着る順番に大小、自分の体に合う物を選んで着る。布靴下、防寒靴、防寒外套、防寒帽、ゲートル、おおてぶくろ 大手套まで越冬も可能な日本兵がでぎ上がった。満鉄の人たちも全員軍服となり、見境もない。肩章もなく全員一兵卒となった。胸には白布で名札を付けた。これで上下なく平等になった。

収容所内を見て回る。四つの大きな建物、丸太を組んだ校倉造りだ。あせくら 真ん中に廊下が通っていて両側に五つ部屋がある。八部屋は三十人近く入れ、二部屋は二十人くらい入れる。全部二段ベッ

ド、各部屋にベーチカ、電灯一個、壁は石灰で真っ白く塗って明るく清潔な感じだ。一棟に二百人はゆるゆる入れる。四棟を鉄条網で三メートル幅で二重に囲ってあり、二カ所に屋根より高い監視塔があり、監視兵が二人でいつも見張っているくらい。一メートルも近づくと怒鳴られる。早く離れないとボンと近くへ弾が飛んで来る。小便所、大便所も見て回った。三棟は捕虜舎、一棟は炊事場、食堂、所長室、医務室兼事務室、保管庫などになっている。一棟に満鉄が入り、あと二棟に兵隊が入った。

翌日は身体検査。呼ばれた順に医務室へ入る。また全裸になる。軍医の前へ行く。体中よく見る。傷、ビンタを執拗に聞く、新しい傷は根掘り葉掘り、今度のソ連との戦傷ではないか……。最後に尻の皮を引っ張り健康度の等級二級が言い渡され、捕虜番号二九七と言われ、服を着る。肩甲骨の皮を引っ張り牛馬に打つたい注射をする。された瞬間、心臓が止まるかと思うほど痛かった。

歩くにも注射の跡に響いて歩けない。やっと部屋にたどり着く。ベッドに仰向けには寝られない。腹ばいで、笑っても響く。夕食に食堂に行くのもすり足だ。こんなに痛い注射は初めてだと皆言っていた。病気をしないようソ連の方針か。水を飲んだらアメーバー赤痢になるから生水は絶対に飲まない、飲んではいけないと言われた。雪にもアメーバー赤痢菌があるからだめと嚴重注意される。

十月二十五日、「部屋長、集合」がかかる。婦国の準備命令かと皆喜ぶ。どっこい、明日から仕事。一級者のみ八時に門の前に集合。伐採と製材工場で働くことになった。やはりソ連では「働かざる者、食うべからず」か、共産党の国だ、仕方がない。自分の食い分はやっぱり働かなければと、元気な一級者はそう思うが、やがて二級者も働かされる時が来ると覚悟する。一級者に製材工場の仕事の様子を聞いても、仕事が大変か口が重くて話してくれない。十一月一日から二級者も出

た。八時十分前ころに若いロシア兵に囲まれ工場へ着く。八時のサイレンが高い煙突の上で鳴った。作業開始だ。板運び、原木運び。初めは見習いで、仕事を覚えるのに二、三日はかかる。そのうち小人数でやるともう息つく間もなく、早く休憩、帰りを待つようになり、帰りは収容所へと急がされる。

十一月中ごろ、伐採の土場整理に変わった。伐採は目周り一メートルもある松の木を倒すと、十メートルが二本と、末口十五センチで十メートルが取れないと六・五メートルで切る。ですから原木は十メートルの物と六・五メートルの二通りしかない。その原木を出しよように松枝を何カ所かに整理集積する仕事で、割と平坦な山でもずるずると引っ張ったりして大変疲れる。朝八時に出発して山道を一時間は歩いて伐採現場へ着き伐採する。土場整理はする。昼は弁当、パンとスूपは焚き火で飯盒で温めて済ます。もう気温は零下一〇度から一五度はある。ロシア兵は仕事は全然

無関心、逃亡だけは神経質だ。朝からずーっと火の番で何もしない。夕方五時になると全員集合し帰る。前にも、後にもついて出発する。銃には弾を詰め、剣も着け、歩き始めると「ヴィストラ、ダワイダワイ」が始まる。先頭のロシア兵が「早く歩く」、それに遅れないようについて行く。速い速い。六キロ行軍より速い。前の人に必死でついて行く。ちょっとよるけて列外へでも出たらボンと来る。二発目がきたら終わりだ。もう薄暗い。斧、ノコギリ、飯盒、皆捨てたくなる。やっとな収容所へ着いて我に返る、これが毎日だ。だんだん山奥へ行く。なお帰りがつらくなる。一晩寝ても疲れは取れない、溜まるばかりだ。

病気になるって休む人がうらやましい気持ちになつて、もう俺も限界だと観念しかけたとき、病人の看護者を探していることが耳に入る。とにかく山から抜けられたらの一心で申し込んで、翌日より看護についた、十一月末であった。看護係に指導してもらう。二十人ばかり病人が入ってい

た。熱が治まった者ばかりだが下痢が止まらない者が多い。その者が下痢しそうになると呼ぶので急いで石油缶を持って行く、それに用を足す。二段ベッドの上段の者は下痢が治まって上れるだけの力がある者、下段の者は下痢している者と上段へ上る力がない者で、上段の者は便所へも行く。食事でも食べ回復過程にある者でこの方達はあまり面倒にはならない。病人が入って来た。熱はないか、下痢しているか、上段へ上れるか、聞いて寝台を決める。病人が二人三人とどんどん増えてくる。隣の部屋も病人でいっぱいらしい。石油缶を欲しがって忙しいときもある。食事は炊事係が見当で持つて来る。下痢している者はほとんど下痢が恐くて食いたがらない。食わなきゃ回復もないので食うように勧めてもなかなか食ってくれない。とうとう俺のベッドも病人に取られ、床に毛布を敷いて寝る。夜中にも起こされる。昼間もうとうとしてる。それでも「ダワイ、ダワイ」よりつらくない。発熱で頭がおかしくなつて朝から

晩まで流行歌を歌っている者、食事だと言って目の前へパンを置いても手も出さない、顔の前で手を振っても分らない者、朝になって隣に冷たくなって死んでいる者も出てきた。二、三人の手を借り下へ降ろして廊下へ出す。持ち物全部に毛布を掛けておく。各棟の入り口の物置へロシア兵が二人で運んで行く。

十二月十日ころ、先輩の看護者が「この仕事やめたい」と。「なぜですか」「うつるから」「本当ですか、本部に薬はないですか」「ない、あるのは体温計が一本だけだ」。急に恐ろしくなり、いても立ってもいられなくなって、元の部屋の上等兵に頼む。「すぐとはいかない、上部の者に話してみろ。二、三日待て」と言ってくれた。もう病人が怖くて他人どころではない。眠れない。死ぬ者が毎日のようにある。もういらいらしていた。

十二月十四日夕食後、上等兵から伝言があった。急いで行く。「もう病室へ行かなくても良い、上部も承知済みだ」と言われた。「そのかわり今

晩十時から明日六時まで穴掘りに行ってくれよ」と。もう病室から抜けられればそれで十分、十時に門のところへ行く。馬籠に乗って行く。コルホーズ畑を通って丘の上で火を燃やしている。小松が生えている斜面を三メートルばかり登る。八畳間ほどの穴の中で火が燃え盛っている。前任者と交代した。監督と六、七人になった。薪をくべたりした。監督が「やるぞ!」と言うと火かき棒で火を片方に寄せる。「それ!」でスコップやツルハシを持って飛び込んで灰のようになった土をスコップで外へ放り出す。ツルハシで隅をつつく。一生懸命無我夢中でかき出す。「やめ!」で小さな梯子が降ろされ、駆けずり上る。防寒外套に火がつきそうになる寸前だった。二分そこそこの間、二センチも深くなったか、製材工場から出る板の耳を放り込む、火力を上げる。監督の次の命令まで板の耳を投げ入れたりして待つ。外気は零下二〇度はある。顔は火に当たって熱くてたまらない。背中は防寒外套を通して冷気が針で刺す

ようにチクチクする。背中を火の方へ向ければ顔が凍傷になりそう。防寒靴の下から足指が凍傷になりかねない。いつも足踏みしている。頃合いを見ては監督が号令をかけた掘る。その繰り返しだ。監督の言うには、上一メートルは凍土、その下一メートルは永久凍土、その下は柔らかい土になる。そこを平らにして完成だ、大体六〇七日はかかると思うと言っていた。何回繰り返しただろう、櫓の馬の鈴音で交代が来たのを知った。やっと終わった。帰りは歩いて帰った。六時を回っていた。夜明けは九時にならないと白んでこない、今は真つ暗だ。もう穴掘りは二度とやりたくないと思つた。朝食を食つてぐっすり寝た。

目が覚めたら、今夜十時から材木運搬に行つてくれと頼まれ、仕方なく承知した。十時前に製材工場の揚木機のところへ行く。馬車につけた材木を降ろす。その馬の手綱を受けて交代する。氷の上を歩いて二、三キロ上流に行く。材木を馬車に積む係が二、三本くりつつける、そして手綱を

持つて歩く御者だ。八時間ぶつ通し歩く。火にあぶられないのでずっと楽だ。やはり三交代早出(六時)、中立ち(十四時)、遅出(二十二時)、一週間でかわっていく。朝九時になって東の空が白んでくる。十二時になつても南の方三〇度くらいのところを上り、霞がかかっているように黄色くぼんやり、眩しくもなくあつたかみもない。いつも零下二〇度から三〇度だ。夜は真つ暗くても氷の上は星明かりか何かの光が反射するのか、足元は分かる。馬はスパイク蹄鉄をつけているので踏まれないよう気をつけた。

十二月二十七日、中立ちで出る。少し寒気がしたが出た。二十二時まで何とか勤める。帰つてきたら部屋の者が頭に手を当てて「これは四〇度あるぞ」と言われすぐ入室、ベッドへ倒れ込む。天井を見ていて、どうも自分の部屋ではないと思つていた。近くへ人の気配がした。「ここはどこだ」。途端に「おーい、こいつは生きてるぞ」と皆に聞こえるように言った。「今日は何日だ」

「二日だ、一月二日だ」と聞こえた。ここは医務室だ、医務室までが病室になったのか、ああ俺は生きていくという感じが何となくしてきた。大声を出した。看護係がお皿を持ってきて、「まずこれを飲め」何かの重湯だ、気持ち良く飲んだ。

「お前は運が良いぞ、ここ三、四日はパンも大豆も穀物の配給は何もない。皆キャベツの塩漬けの酸っぱいのを主食代わりに食っている。炊事がコウリヤンを少し取っておいたから病人だけその重湯をすすっている。今は伐採も製材工場も働く者がいないので休んでいる」熱はないが、頭をかくとふけと一緒に頭の毛がぼろぼろ抜ける。パンも配給が来た。初めは石油缶で小便をしたが、三日目ころからは外便所に行かれた。部屋の看護係のように動いた。ペーチカへ薪をどんどんくべ、部屋を暖めた。薪の使い過ぎだと炊事から文句を言われた（病室の薪は炊事の係）。

十日ばかりで三級者ばかりの部屋へ追い払われた。何でもやって体力をつけ、絶対に日本に、妻

子の所へ帰ると心にすっかり誓った。たまたま門の所を通ったら村の人が「ちょっと手をかせ」と手招きしたのでついて行くと、物置から死体をロシア兵が出し、二人で片方ずつの手を持ち、ロシア兵が足を持って櫓に積む。五、六体も積んだか、いっぱいになったので毛布をかけて村の人が馬櫓を引いて行った。死体は全部袴下だけで上体は裸だ。物置の中でロシア兵が衣服を剥いておくのか。ある日、食堂に通訳がいたので、「死んだ人はあれでは可哀想だから襦袢くらい着せるようにして下さい」「ソ連では人が死んだら何にもならない、唯の物だ、腐ったリングと同じだ」と言っている。「袴下はスターリンの慈悲だとか言っている」と。通訳も、負けたのだから何も言えない、仕方ないと言う。情けなき、悔しさが目の前に、大きな厚い壁にさえぎられ、どうしようもなく無力さを痛感させられた。悔しいが泣き寝入りだ、考え始めると眠れなくなる。変になってしまう。自分を守るのは自分しかないと痛感す

る。死んだら腐ったリンゴだと、死んだら終わりで、俺は死なないぞ！

一九四六年二月ころ、初めて炊事の使いで二人で外に出た。帰りに、リヤカーに大きな箱を積んで、その上に釜、鍋、フライパン、薬缶、組板などを乗せているのを見た。一目で引越したと直感した。夫婦で降ろしていた。近くへ行つて、大きな箱を降ろすときは手伝つてやろうと手を出そうしたら、手を振つて断られた。そして、箱の蓋を開けて見よと指差した。ハンガーに掛けたアッパパーがたった一枚あるだけ。手編みのセーターもない。二人で顔を見合わせ驚いた。衣類の配給の厳しき、捕虜と同じだ。「着たきり雀だ」と声に出てしまった。中央アジアでは綿花も相当栽培されているが、衣類の統制、配給の厳しきを見せつけられ、戦争に勝つためこんなに徹底し、現在も続行している。「交換、交換」とパンやジャガイモを見せ、衣類、綿、布と交換し欲しかった気持ちが納得いった。四、五歳の子供が親

の配給の新品の上衣を着て、袖が地面にすれすれで手も足も見えない。面白く見たが、子供用の配給はないのか。

製材工場の引込線へ、輸送の都合で貨車が時々入る。石炭、岩塩、大豆等は無蓋車でバラ積みなので震動でこぼれる。三、四人の女性が小さな袋を持ってかがみ歩きで線路の小石の間に落ちている大豆を拾っている姿は、ミレーの「落穂拾い」と同じだ。食料配給の乏しきの証明か。

一九四六年四月四日、通訳と話す。やっと死亡者がなくなつた。今日までに二百四人死んだ。そのうち伐採で木の下になって一人、食料運搬の事故で一人、ロシア兵とぶざけて銃の暴発で一人、あとは二百一人、発熱、脳症、栄養失調、ネフローゼ等だ。入所人数は六百人が少し欠けたうち、満鉄が二百五人だった。三人に一人の割だ。これからも気をつけましようと言つた。「ダワイ、ダワイ」はやめてもらいたいと言つたら、「伐採など遠くへ行く所は馬車かトラックで行っている

よ」と言った。

四月の末に日本と同じ握れる雪が降った。雪合戦など無駄な体力消費をする者はなかったが、小さな雪達磨が隅の方に一つあった。

四月末の検査で二級になった。製材工場へ行く。板並べをやる。病後の体にはこたえた。山へやられないよう頑張った。第一日曜日に初めての入浴だ。裸になって服を全部ハンガーにくくり、大きな鉄釜の中へつるす。十五人分は入る。下で火を炊き、熱殺菌する。その間に桶一杯のお湯をもらい、布靴下をタオル代わりに体をこする。石鹸もない。それでも気分は良かった。熱殺菌された服を着る。久しぶりにさっぱりした。ここは村の共同風呂だそうだ。やはり日曜日にやるらしい。それから毎月の第一日曜日が入浴に決まった。やはり楽しみになった。

製材工場で何の気もなく電灯線を見たら、一メートルか二メートルに必ず繋ぎ目が見えたので、あちこち見たらどの線も繋ぎ目である。低い所

を見たら鉄線で十五番線だ。収容所へ来ている線も同じだ。ハハトイ全部の電線が繋いだ鉄線だ。これは乾草などの梱包を切った鉄線だと思った。銅はどうしたのだろう、大砲に薬莖に、綿類は綿火薬にか、日本はとも考え及ばなかったのか、それで良かったのか悪かったのか、いくら考えても分らない。

この村はせいぜい三十戸くらいしかない。村人は純朴のようだが言葉が通じないのでさっぱり分からない。凍結期間は男子は伐採、工場整理の監督、製材工場では機械関係の仕事の指図など、また伐採の山への送り迎えの御者、自動車運転の仕事で、村民と捕虜が一体となっていた。

五月以降は「ダワイ、ダワイ」もなく、病気になる者も出なかった。何だかつきもの（悪霊）が落ちたように明るく元気になった。民家の建築（原木を積んだ校倉様式）の手伝い一週間、キャベツの切断塩漬け、約一カ月の手伝いなどもした。

ある時、通訳に「ソ連は何で宗教を禁じているのか」と。「共産党は宗教は麻薬であると言って、良く分からないが共産党思想の施行に都合があるからではないか」と通訳氏も納得できないようだ。

一九四七年二月には健常者全員、一カ月山奥へ伐採に行った。大きな天幕を七、八棟造り、泊り込みで材木を出した。ある日切った木が倒れると、ちょうどガラス棒をコンクリートの上に落として割れるように砕けた。途中で作業中止したが、帰って来て聞いた話では、一日、零下五三度の日があったそうだ。その時は鼻や頬も白く凍傷になったが、互いに見つけて注意し合った。

ダモイ列車が通るようになった。所長もハラショウラポーターを早く帰すと言っているので気をつけている。

製材工場の引込線へダモイ列車が入っていることもある。昼飯の往復に貨車の脇を通ることもある。二言三言話すだけ。どこから来た、もう一カ

月近いと言う者もいる。「サマルカンド」だの「ドウシャンベ」など言われてもどこにあるのか見当もつかない。「一級者か」「三級、二級だ。一級者はまだ残って働いているよ」

八月に入って、草刈りだと言って馬車に乗って遠くへ行く。御者の若い男に草刈り鎌を持って来て渡され、刈り方を手取り足取り教えてくれた。初めはまるつきし刈れない。馴れるに従ってどうやらできる。この鎌で満州で追剥ぎに遭ったことも思い出した。若い男が時々見に来て、足幅とか姿勢など教えられる。だんだん上手になる。昼食休みに彼の刈った所を見た。息が詰まった。まるでテニスコートのようだ。余りにも見事で圧倒され、俺もこんなにやってみようと発憤した。

十日ばかりしたころ棒を四本立て「これが一人のノルマだ」と言った。百メートル四角の広さだ。そして「君ならできる」とおだてられた。ある日、夕食を済ませ立ち上ったら遠くの山の向こうが赤黒い。真っ赤で大きな山火事だと思って見

ていると、どんどん広がりにこっちに來ると思つていたらもう収容所の建物も赤くなり、目の中まで、腹の中まで赤くなつてしまつた、と感じた途端に元の夕方に戻つた。初めから二分もあつたか、ぼーとしていたら誰かが「オーロラだ」と言つた。草刈りも一人前になつた。

月末検査には、あちこち体が痛いように軍医に言う。九月は製材工場へ行つた。そしてまた九月の身体検査にも、仕事が大変と訴える。ハラシヨウラポーターでなくて結構、早く帰れば良い。

また、十月にも節々が痛むようなことを言つた。やはり二級だ。十一月四日夕食後明けには移動するから仕事に出なくて良いと言つてきた。どこへ移動か、成り行きに任せる。早夕食を食つて医務室へ集合とのこと。医務室へ入ると全裸になつて衝立の向こうへ行く。また袴下、襦袢の順に着ていく。靴、帽子、ゲートル、水筒、飯盒を持つて、入り口に置いたコップ代わりの空き缶に皆の氏名、住所番地をぎつしり書いたのを取りに行こ

うとしたら「駄目だ」とロシア兵に止められた。そして十人ばかりでロシア兵に連れられハトイ駅から列車に乗つた。「言うことを聞かないとダモイが遅れるぞ」と言われた。初めてのお粗末な客車の経験。三つ目の駅で降りる。引込線が何本もあり、電灯は煌々とつき大きな駅だ。歩いて坂の上の大きな建物に入る、ヒロク病院だと。病気を療養してどこかの収容所かダモイか、あなた任せだ。

毎日、麻雀、将棋、雑談で明け暮れる。この病院の食パンは真つ白でよく膨らんでいたが、六ツ切り一枚分しかないのが淋しかった。

一九四八年五月五日出発、ナホトカへ。六月一日、我が家へ着く。

今、平成十五（二〇〇三）年八月、世界を見渡したとき、紛争している所は数え切れない。ロシアで「宗教は麻薬だ」と聞いたが納得がいかなかった。が、宗教が麻薬的働きの現象をしている。私が皇国のために破甲爆雷を持って敵戦車の

下へ突進する気持ちになったこと、宗教のためツハード（聖戦）と自爆していることを思うと、宗教の禁止もむべなるかなと感じます。

私は今、孫子曾孫の代まで、召集から帰還までの三年七カ月を、全くの無駄に決してさせたくないと思っております。

【執筆者の紹介】

大正三年六月二十日 清水市南矢部に生まれる

昭和八年四月 静岡市用宗食品会社就職

昭和九年六月 徴兵検査丙種合格

昭和十四年 結婚

昭和十九年十一月十日 応召

昭和十九年十一月二十三日 満州海拉爾、満州歩

兵第二五五連隊通信

中隊配属

終戦時 一等兵

一九四五年十月二十一日 チタ州カダラ地区ハハ

トイへ収容される

一九四八年五月二十五日 舞鶴入港 六月一日帰

宅

（静岡県 熊谷 精一）

樺太虜囚物語

愛知県 兵 東 政 夫

大正十一年生まれ

大正十一（一九二二）年九月二日、現在の豊橋市小浜町、農家の二男として生まれる。

村外れの「上原」と呼ぶ洪積台地にあった騎兵連隊が、昭和七（一九三二）年九月二十六日の午後、満州に移駐していった。その出発の刻間近、軍装した軍馬の頭が狂奔して放馬、身送りの人波を駆け抜けていった。その後を一人の兵隊が息せき切って追っていった。緊張と不安の顔に汗がしたたり、晴れの日の悲しい出陣であった。幼い私はその光景が忘れ難く、いつまでも胸を痛め